

に其の父の為に広く功德を修る。因果の理に信はざらむや。

幼き時より網を用魚を捕りて現に悪しき報を得る

縁 第十一

幡磨国飾磨郡の濃於寺に、京の元興寺の沙門慈心大徳、檀越の請に因りて夏安居の間法花経を講く。時に寺の辺に漁夫有り。幼きときより長るまで網を以ちて業とす。後の時に家の内の桑林の中に匍匐ひ、声を揚げて叫号びて曰はく「炎火身に迫る」といふ。親属救はむとすれば、其の人唱ひて言はく「我れに近くことなかれ。我れ頼に焼かれむ」といふ。時に其の親寺に詣でて、行者を請求む。行者呪する時に、良久にありてすなはち免る。其の著たる袴焼かれて、漁夫悚慄り、濃於寺に詣でて大衆の中に於て罪を懺い心を改め、衣服等を施し、経を誦ましめ竟りぬ。此れより以後、また悪を行はず。顔氏家訓に云ふが如し「昔江陵の劉氏、蟬の糞を売ることを以ちて業とす。後に一の児を生み、頭は具是れ蟬にして頸より以下は方人の身と為る」といふは、其れ斯れを謂ふなり。

人と畜とに履まるる髑髏救収められて霊しき表を示して現に報ゆる縁 第十二

高麗の学生道登は、元興寺の沙門なり。山背の惠満の家より出づ。而往大化二年丙午に宇治橋を営りて往き来りし時に、髑髏奈良山の溪に在りて、人と畜とに履まる。法師悲びて従者万侶をして木の上に置かしむ。同じき年の十二月の晦の夕に迄りて、人寺の門に來りて白さく「道登大徳の従者万侶といふ者に遇はむ」とまうす。万侶出でて遇ふ。其の人語りて曰はく「大徳の慈の願を蒙りて、平安なる慶を得たり。然うして今夜にあらざれば恩を報いむに由無し」といふ。すなはち万侶を將て其の家に至り、閉ぢたる屋よりして屋の裏に入る。多く飲食を設く。其の中に己が分の饌を以ちて万侶と共に食ふ。其の後夜にして男の声有りて万侶に告げて曰はく「吾れを殺せし兄來らむ。故に早く去れ」といふ。万侶怪びて問ふ。答へていはく「昔吾れ兄と共に交易に行き、吾れ銀四十斤ばかりを得たり。時に兄妬忌みて吾れを殺して銀を取りき。爾れより以還、多く年歳を経て、往き來る人と畜とみな我が頭を

施主。掠家長公をさす。一六夜具。底本訓釈「被(不須万)」。一七明日物を得ることは今この物を盗んで出て行くことに及ばない。「明日得」と「取れ被而出」とを比較し、「取れ被而出」をえらぶ。一八このあたりを、今昔物語集・十四ノ三十七は立留ア、音ノ有ツル方ヲ何ヒ見ルニ、人不見アリ。只一ノ牛有り。僧此ノ音ニ恐レテ返リ留ヌ。傳ヲ思フニ、牛ノ可レ云キニ非ネバ、怪ビ思ヒ乍寝ヌ。其ノ夜ノ夢ニ、僧牛ノ辺ニ寄タルニ、牛ノ云ク、「我ハ此レ、此ノ家主ノ父也。」ト云フ、ト見テ夢覺ヌ」としている。僧の夢の中で牛がことばを發した、としている。今昔物語集では人と動物との言語を介しての交渉は夢の世界でのみ許容されたとする森正人の指摘がある。本書では、夢の中、という設定無しに動物が人のことばを發している。動物の發話については扶桑略記も疑問を呈している。元養老令では六歳以上の男子には二段の口分田が給された。口分田には一段につき二束二把の田租が課せられた田也。本説話では、男子に給せられた口分田の稲をその男子のために用いずに、他のために流用したことを、問題としている。「束は、稲をはかる単位。十把。稲一束から米五升がとれる(令義解・田令)」。二〇たとえは法苑珠林・債負論・感徳縁所収の説話十一話中三話が牛に転生して前世の債を償う内容。この型の説話は多い。三転生は証拠によって証明される。証拠は物品であることが多いが、行動であるばいもある。三午後三時から五時のころ。橋本万平に入つてから「刻が用いられた。三より高い地位の存在たとえば人への転生を暗示する。

第十一縁 悪業についての現報説話。三宝繪・法六に引用。

一兵庫泉飾磨郡。姫路市あたり。二未詳。三本書では、「故京元興寺之村(中巻二十九縁)」といった例外もあるが原則として飛鳥の本元興寺は単に「元興寺」と表記され、平城京の本元興寺は「左京元興寺」と表記される。本説話のばあいも平城京の元興寺であろう。平城京以外の転生は養老二年(七二〇)。四未詳。本説話以外に所伝をみない。五四月十六日より七月十五日に至る期間、僧尼は外出せずに、心を静めて修行した。これを「夏安居」「安居」という。なぜ夏季におこなうか、ということについては、四分律行事鈔・上ノ四は夏のそなえている三つの欠点をあげて理由とする。その第二は「損傷物命、違慈寔深」。六妙法蓮華經、八卷。あるいは七卷。安居縁起によれば、天平勝宝元年(西七二〇)、孝謙天皇は安居法会を創始し、京畿十余寺、七道六十余国に妙法蓮華經と金光明經とを講演せしめた(東大寺要録・八。七底本訓釈「漁夫(二合)魚取男」)。八底本訓釈「迄(至也)」。九物命を損傷しないために、と行う安居の期間中である。漁夫のおこないは、他の時期よりもきびしく非難されたのであろう。一〇「行者」とあるのは上文の慈心大徳をさすようにも読めるが、本書では「行者」と称されるのは優婆塞がほとんどである。本説話のばあいも慈心大徳ではなく別人の優婆塞をさすか。一底本訓釈「袴(波加末)」。二北斉の顔之推(雲(二五〇)の撰。この文は佛心篇にみえる。弁正論・七所引の文に拠るか。三中国湖北省。四底本訓釈「劉(音、利于反)」。五ウナギ。底本訓釈「鯉(奈加天)」。六「鯉(ムナギ(二名義抄))。一六底本訓釈「糞(阿川毛乃)」。一七すべて。

踏む。大徳慈を垂れ、見苦を離れしむ。故に汝の恩を忘れず、今宵報ゆらくのみ」といふ。時に其の母と長子と、諸の霊を拜まむが為に其の屋の内に入り、万侶を見て驚き畏りて其の到来る所以を問ふ。万侶は具に前の事を説く。母長子を罵りて曰はく「呼矣、我が愛子は汝に殺さる。他の賊にあらざるなり」といふ。すなはち万侶を礼みて、更に飲食を設く。万侶還来りて状を以ちて師に白す。夫れ死霊白骨すらなほし此くの如し。何にいはいむや、生ける人にしてあに恩を忘れむや。

女人風声なる行を好み仙草を食ひて現の身に天に飛ぶ

縁 第十三

大倭国宇太郡漆部里に、風流なる女有り。是れすなはち彼の部内の漆部造磨の妾なり。天年風声を行とす。自づから悟りて塩醬を心に存む。七の子を産生み、極めて窮しく食無し。子を養ふに便無し。衣無く藤を綴り、日々に沐浴みて身を潔め綴を著る。毎に野に臨むときは草を採ることを事とす。常に家に住るときは家を淨むることを心とす。菜を採り調へ盛り、子を唱ひ

端坐して咲を含み馴へて言はく「敬を致して食へ」といふ。常に是の行を以ちて身心の業とす。彼の氣調恰も天上の客の如し。是れ難破長柄豊前宮の時甲寅年に、其の風流なる事に神仙感応し、春の野に菜を採り仙草を食ひて天に飛ぶ。誠に知る、仏の法を修はずして風流を好まば仙菓感応することを。精進女問經に云ふが如し「俗家に居住るとも心を端しくして庭を掃かば五の功德を得」とのたまふは、其れ斯れを謂ふなり。

僧心経を憶持ちて現報を得奇しき事を示す縁 第十四

釈義覚は、本百済の人なり。其の国の破るる時に、後岡本宮に宇御めたまひし天皇の代に當りて、我が聖朝に入りて難破の百済寺に住む。法師の身の長七尺、広く仏の教を学びて心波若経を念誦す。時に同じき寺の僧慧義といふひと有り。独夜半に出で行く。因りて室の中を見れば光明照り耀く。僧すなはち怪び、竊に扉の紙を穿ちて法師を窺看れば、端坐して経を誦み、光口より出づ。僧驚悚り、明日に悔過して周く大衆に告ぐ。時に覚法師弟子に語りて言

第十二縁 あやしき表(し)の説話。善業に於いての現報説話。今昔物語集・十九ノ三十一に書本。扶桑略記・大化二年条に引用。  
 一 底本訓釈「履(不)方(留)か」。一 元 底本訓釈「履(上)音(下)音(反)」。二 二(合)か、比(止)加(之)良」。三 下(卷)二(七)縁。四 高(句)麗(の)僧(か)。書(紀)・白(雉)元(年)条(にも)、道(登)が「高(麗)の」故事(を)引(いて)弁(じて)居(る)記(事)が(ある)。本(書)で(は)中(卷)七(縁)の智(光)の弟(子)が「学(生)と(さ)れ(て)居(る)」。三 大(化)元(年)六(卷)七、十(師)に(任)ぜ(ら)れ(る)。白(雉)元(年)六(卷)七、白(雉)が(祥)瑞(である)こ(と)を(弁)じ(て)居(る)宇(治)橋(断)碑(に)世(有)釈(子)・名(曰)道(登)・出(自)山(尻)・惠(満)之(家)・大(化)二(年)・丙(午)之(歲)・構(三)立(此)橋(・濟(三)度(人)畜(と)み(え)る。三 本(元)興(寺)・三 惠(満)は(僧)名(であ)ら(う。四 六(四)六(年)・五 宇(治)川(に)か(か)る。橋(の)意(に)用(い)る「橋(は)・「荷」に(由)来(する)文(字)箋(注倭(名)類(聚)抄)」。六 底(本)訓(釈)菅(作)也」。七 奈(良)市(と)京(都)府(と)の)境(の)丘(陵)・大(和)か(ら)山(城)へ(の)経(路)。八 底(本)訓(釈)「溪(佐(波)爾)」。元(宇)治(橋)断(碑)に「濟(度)人(畜(と)ある。原文(「為(人)畜(所)履(底(本)訓(釈)黄(介)毛(乃)爾)」。これ(よ)り推(して)「為(一)所」の(被)動(は)「に」ら(る)ら(う)と(訓)ん(で)お(く。三 高(燥)処(なら)ざる(所)に(葬)ら(れ)た(死)屍(が)・生(者)に(移)葬(を)求(め)・高(燥)処(に)葬(ら)れ(て)安(楽)を(得)た、と(い)う(説(話)「異(苑)七・商(仲)堪(・搜(神)記(十六)・文(類)・広(記)・三(二)・衰(無)忌(・太(平)御(覽)七(一)八(所)引(幽(明)録(・尋(陽)參(軍)など)の(承)詔(に)つ(ら)る。下(卷)二(七)縁。三 二(月)の(晦)の(夜)に(は)死(者)の(魂)が(こ(の)世(に)帰(つ)て(来(る)・と(さ)れ(た)和(泉)式(部)統(集)四(曾(丹)集(六)・徒(然)草(十九)・底(本)訓(釈)「晦(川)支(己)毛(利)」。三 底(本)訓(釈)「己(乃)己(呂)」。は(誤(写(本(文)に)も(と)つ(く。三 今(夜)で(な)い(な)ら(ば)恩(が)え(し)を(する)方(法)が(無(い。三 底(本)訓(釈)「裏(内)也」。

一 諸(霊)を(拜)する(時)後(夜)は、上(卷)三(縁)で(童)子(と)鬼(と)が(争)つ(た)時(である。二 よ(う)す。三 中(卷)十(二)縁(は)豆(人)心(志)恩(歎(とし、イ(メ)ー(ジ)の(結)び(つ)き(を)み(せ)て(居(る)。  
 第十三縁 「仏教」を知らない人であっても、そのおこないが仏教にかなえばおのずと善果を得る。「みさを」なるおこなは、おのずと善果とものである、と示される。今昔物語集・二十ノ四十二に書本。  
 四 国会図書館本訓釈「風声(三左乎)」、底本訓釈「風流(二合、美佐乎)」「氣調(三佐乎)」。本説話では「みさを」の表記を「風声」「風流」「氣調」と変化させている。「風声」「風流」「氣調」は、態度、心の状態を意味する語。評価すべき態度、すなわち、かなり具体的な限定されたものをさしている。「心」といった、身边を清浄に保つ生活態度をさす。菜食が述べられるのも、穢れを去つた生活態度ととらえてのこと。下文の精進女問